

## 受験奮闘記～桜修館中等教育学校～立教大学観光学部(合格者の声)

## 「ボクが学んだこと① 石川塾との出会い」 T.S.

これから隔週にわたって、現役大学生で現在石川塾の講師を勤めている私・鈴木の中学入試と大学入試の体験記を連載していきます。はじめにお断りいたしますが、僕の体験記はあくまでも僕だけの体験です。「こういう勉強をした」「こういう生活を送っていた」ということを記述しますが、「こうした方がいい、こうすべきだ」という考えは毛頭ありませんので、“受験日記”みたいな感覚で読んでいただくと幸いです。

さて、私が石川塾に出会ったのは今から10年前になります。当時私は小学4年生でしたから、今指導している生徒たちの多くはまだ生まれてすらいません。石川塾に入る前から私は、ぼんやりとはありますが中学入試を視野に入れていてそれがきっかけで母が石川塾を勧めてくれたのです。中学入試を考え始めたのは小学2年生の頃。テレビの「高校生クイズ」で東京の開成高校が優勝したのを見て、カッコいいなと思ったからです。それをきっかけに「頭がいい学校に入ってあの高校生みたいになりたい」と進学校への憧れを抱くようになりました。

当時の石川塾のカリキュラムは今とあまり変わっていません。変わったのは連絡帳とカラーコピーが導入されたくらいです。はじめに朗読暗唱をやり、百マス計算をしてそのあとは「嵐の中の灯台」「理想の国語教科書」を使った要旨要約をこなしました。そう、要旨要約といえば「100字トピックス」というカリキュラムもありました。読売なども新聞等を購読して、その中から気になったニュースを100字でまとめるというものです。そういえばここに戻ってきてからこれをやっている生徒さんは見ていませんね。結構難しいのですよ。その他にも、齊藤孝の「国語力シリーズ」で国語の文章題を解きました。文中から手がかりとなる部分を見つけて答えを導く力をつける課題なのですが、これが後になって大学入試のときに役立つのです。今嫌々やっている生徒の皆さん、よく覚えておいてくださいね？(笑)

石川塾でやったカリキュラムによる成長は、これまで通った塾で学んだどんなものよりも大きなものだと思います。一見単純そうに見える朗読暗唱や百マス計算も、今になって考えるととても重要な力を養成するものなのです。基礎ほど大事なものは無いんだと今になって理解できます。

まず朗読暗唱ですが、単純にものを覚える力がつくだけではなくその文章への知識も深めることができ、教養が身に着きます。例えば「平家物語」や「枕草子」などは中学の古文の授業でも取り扱う文章です。石川塾の朗読暗唱でその文の暗記や内容把握をしていけば、「あ、これ石川塾でやったなあ」「そうそう、こういう文章だったよね」と思い出して周りの誰よりも早く文を理解することができます。また、大人になったときでも会話のネタや知識披露で他人から一目置かれるようにもなります。「そんなモノ必要あるの？」と思うかもしれませんが、意外と使えます。社会に出てまだ少ししか経っていないひよっこが言うのもなんですが、社会に出ると年長者と関わるシチュエーションが必ずあります。そこで自身の教養の良さを披露すれば「この子頭いいな」「そんなこと知ってるんだ、すごいなあ」と思われて、その人との人間関係が上手くいくことがあります。朗読暗唱は人生における“予習”になるのです。

百マス計算に関しては、多くの生徒さんが「ムダ」と思っているかもしれません。今やスマホの電卓機能でポチポチやれば答えが出る世の中ですからね。しかしこれが学校の数学のテスト、高校・大学入試の場だとしましょう。電卓は使えません。大きな数字から小さな数字まで、全部自分で計算しなければいけません。そこで問われるのが「スピード力」と「集中力」です。計算を素早く行わないと制限時間内に問題を終わることができません。日々石川先生から容赦なく「スピード」と「集中」を叩き込まれているのは、こういった試験の場で無駄なく正確に計算をすることがとても重要だからです。

「教養」「スピード力」「集中力」を鍛えることができたのは、ここでの大きな成果です。元々私は計算のできる子だったのですが、いかんせん集中が長続きせずに問題を一つ解くのに結構な時間を費やしていました。今や「世間では名の通る大学」の学生ですが、10年前は今現在いる生徒と同じような状況でした。しかし石川塾の授業を経て、1～2時間は持続できる集中力と文系知識を得ることができました。石川塾でこれらを養っていなければ、今の私はいないでしょう。皆さんも石川塾でこの3つの力をしっかり身につけることができたならば、私と同じ、いや、私よりも上に行く大学生になれる…はずですよ。

さて今回は石川塾での思い出や成果話に終始しましたが、次回から本格的に「桜修館中等教育学校」及び「立教大学観光学部」の受験奮闘記を綴っていきたいと思います。次回もどうぞよろしく願いいたします！！

(毎月1回第2日曜)石川塾 日本史を知る朗読会(無料です) ☎042-710-5768

第11回:4月14日(日) 石川塾 10:00～11:30

テキスト:江藤淳「閉ざされた言語空間～占領軍の検閲と戦後日本～」

第一部 アメリカは日本での検閲をいかに準備していたか

第二部 アメリカは日本での検閲をいかに実行したか (文春文庫¥740)各人購入下さい

(朗読者:石川塾長/林史雄弁護士/理科教師:縄文・リー/ほか参加者)



## 受験奮闘記～桜修館中等教育学校(合格者の声)～

## 「ボクが学んだこと② 都立中高一貫校との出会い」 T.S.

今回から僕の人生最初の関門である中学入試についてお話します。この入試は今後の進路や方向性に大きく関わった大イベントでもあります。中学入試を検討している生徒とその保護者の方々にとって有益な情報となるかは定かではありませんが、経験者としてこれから何回かに渡って記していこうと思います。

中学受験のきっかけである開成高校は開成中学との中高一貫校でした。中高一貫校とは、中学と高校が一つになっていて、中学に入ると自動的に高校に進学できるというシステムを持つ学校のことです。中には進級試験を挟むところもありますが、基本的にはエスカレーター式のため、高校入試をする必要が無くお得な学校なのです。楽をしたかったわけではありませんが、せつかくなら6年間同じ学校で過ごして大学入試に備えたいという思いもあり、中学入試の志望は中高一貫校に絞られました。その頃、母から一冊の教育雑誌をもらいました。内容は中高一貫校の特集でした。首都圏の様々な中高一貫校が紹介されている中、運命の文字がそこにはありました。

「都立中高一貫校」、東京都(当時都知事の石原慎太郎さん)が率先してつくった中高一貫校の総称で、当時はまだ歴史が浅く進学校の新鋭として注目されていました。多くの中高一貫校が“私立”である中、これらの学校は“都立”つまり公立でした。公立であることによってどんなメリットが生じるかという、それはズバリ「学費の安さ」です。公立学校と同じくらいの学費で6年間同じ学び舎に通うことができるのです。言い方は悪いですが、そこら辺の普通の学校の学費でハイレベルな教育を受けられるということです。それゆえに人気が高く、開校したての頃の入試倍率は8とか9とかという数字でした。「倍率は高いが、安い学費で高水準のカリキュラムがある」、これはお世辞にも裕福ではない僕の家にとって最高の場所でした。私立校に深い思い入れは無かったので、颯爽と都立中高一貫校の受験を決意しました。とは言え当時僕は小学5年生、これまでの決断の中で最も大きく重要なものでした。

その秋、両親と様々な都立中高一貫校の文化祭を見物しました。校内の様子や生徒の雰囲気確かめるためです。中でも当時興味を持っていたのは小石川でした。小石川はSSH(Super Science High-school)に指定されている理系学校で、都立中高一貫校の中でもハイレベルクラスの学校です。“当時の”僕は科学教室にも通っていたほどの科学少年で「中学は理科に強い所へ」なんて考えていました。文京区にある校舎は大きく、教室もきれいで清潔感ある場所だったと記憶しています。科学部のワークショップも面白く、「ここは良いな」と思いました。

一方で、そんな小石川にも負けず劣らず魅力的な学校がありました。それがのちの我が母校・桜修館中等教育学校です。元々は都立大学付属高校という名前で、中学から大学まで目黒区の八雲に集結していました。それが数十年前の多摩地域移転ブームで大学のキャンパスが現在の南大沢に移転、そして残された付属中高も2005年に桜修館という名で引き継がれることとなり、2011年に完全吸収されたという歴史があります。付属中高から引き継いだ校舎は八雲ののどかな高級住宅街に囲まれており、山の手の大都会にある小石川とは正反対な立地です。そしてここは「自由と自治」という校風のもと、生徒が主体となって行事や運営を行う「リーダーシップ育成」の学校でした。

キャラクターの異なる両校ですが、受験をするならばどちらか一つに絞らなければなりません。都立中高一貫校の受験日はみな同じ2月3日、一度に複数の学校を受験することはできないのです。小石川か、桜修館か。まるでアメリカの大統領選のような二択問題、これを制したのは言わずもがなですが、桜修館でした。

決断材料はいたってミーハー的なものでした。まず一つは学校まで「たくさん電に乗れるから」です。学校の最寄り駅である都立大学駅まで3回の乗り換えが必要で、普通の神経なら敬遠するような環境ですが僕は違いました。僕は小さい頃からの鉄道好きで、電車に乗って出かけるのが大好きな子供でした。そんな子が「毎日電車に乗って通う」と言われたらそれは狂喜乱舞ものです。乗り換えなど苦ではなく、むしろご褒美です。そしてもう一つが「弓道部の存在」でした。桜修館には弓道部があり、毎年のように全国大会に出場している強豪校です。文化祭でもその珍しい弓道部を見学、在校生の凛とした姿を見て「カッコいい！！ここ入りてー！！」とイチコロになったのです。

かくして僕の入試の方針は決まりました。もともと、最終的に桜修館受験を決めたのはもつと後の話ですが、一応の第一希望は桜修館となりました。思えばこの時から僕の理系精神は消え始めていたのでしょう。次回は都立中高一貫校の入試スタイルと対策について触れながら話を進めていこうと思います。では、また。

(注:石川塾には女子高校生<なきなた部>をあつかった「あさひなぐ」のマンガ全34巻があります)

(月1回第二日曜)石川塾 日本歴史を知る朗読会(無料です) ☎042-710-5768

第11回:4月14日(日) 石川塾 10:00~11:30

テキスト:江藤淳「閉ざされた言語空間～占領軍の検閲と戦後日本～」(文春文庫¥740)

第一部 アメリカは日本での検閲をいかに準備していたか



## 受験奮闘記～桜修館中等教育学校(合格者の声)～

## 「ボクが学んだこと③ やる気が一番！ひたすら解く！」 T.S.

## 都立中高一貫校の受検スタイルと対策

受験体験記も3回目を迎えました。まだ中学受験の段階でこんなに回を重ねていて、大学受験まで完結するのに一体どれだけ時間がかかるのでしょうか？ともかく、今回は宣言通り都立中高一貫校の独特な受検スタイルと大まかな対策(?)を述べたいと思います。

都立中高一貫校の入学試験は「**適性検査**」と呼ばれるもので行われます。読んで字のごとく、「うちの学校に適している人間」かどうかを検査する試験です。この適性検査ですが、一般的に目にする中学受験の試験とはスタイルが大きく異なります。一般的な入試問題といえば、算数の捻った文章問題とか、長い随筆や小説を読んで筆者が言いたいことや登場人物の心情などを問われる問題が出題され、そのほとんどがマークシート式・・・なのでしょうか？私立校を受けたことがないので分かりません。しかし、適性検査は違います。そもそも教科で分けることはしません。

適性検査は、一般的に**適性検査Ⅰ**と**適性検査Ⅱ**に分かれています。学校によってはⅢもあるのですが、多くの学校は2つに分けています。**試験時間はそれぞれ45分**、45分×2=90分で行われます。**Ⅰはいわゆる国語**。長文や複数の文章を読んで筆者の主張または複数の文章に共通するor違う点を説明し、さらにそれに対する自分の考えを大体300～400字で説明します。そう、**Ⅰは「作文」**なのです。この時点で一般的な受験とは大きく異なります。読解力だけでなく、自分の意見を考える力とそれを文章化する力、総合的な国語力が問われます。

そして**Ⅱですが、これは算数、理科、社会の総合問題**です。問題形式は例年大問1が算数、2が社会、3が理科系といった感じです。Ⅰが作文であったように、**Ⅱも論述で答えていくスタイル**です。例えば大問2に年を隔てた「農作物の生産量のデータ」があったとします。そして「それぞれの農作物の生産量はこの年とこの年とでどのように変化したのでしょうか」と問われます。そうしたら受検生は「○○は何倍に増加して△△は何%減少して・・・」というようにそれぞれの農作物の増減を“詳しく”説明していく必要があります。ただ減った・増えただけでは不合格、さよならです。定量的にどう変化したのかを説明するためにちまちま計算して何%減ったか増えたかを求めていくのです。社会系の問題といえども、素早く正確な計算能力と分析力が試されます。

どうでしょう？大体のイメージを掴んでいただけでしょうか。適性検査は何よりも**「分析力(読解力)」と「文章力」**が問われます。問題文を読んでなんとなく分かっただけでは受かりません。そして読解や分析で得た情報を「初めて問題を見る人にも分かるように」説明しなければいけません。これは受検生時代に何度も言われてきました。もちろん指定字数に満たないのは論外です。最大字数をオーバーするのも同様です。問題の指示に従えない人は学校には不要です。多くても少なくともダメ、**「過不足なく書く」**ことが求められるのです。そして最重要項目は**「時間内に解く」**ことです。試験時間はそれぞれ45分、小学校の授業1コマ分で受検生にとっては長いと感じてしまうかもしれませんが、全ての問題が論述式なので相当時間は厳しいです。先ほども申し上げましたが、Ⅱのほとんどの問題は解答に計算を要します。**45分内で計算をして詳しく文を書く**、大人でも難しい試験です。上記の太字で書いたことを成せない受検生はことごとく落とされます。自分でも珍しく厳しい言葉を書いちゃいましたが、それほど都立中高一貫校の受検はハードなのです。自分が受検した2017年度は男女900人以上が応募し、そのうち合格したのはたった160人でした。バーツと簡単に書いてますが、適性検査はそんな簡単には突破できません。ではどうしたら合格に近づくことができるのでしょうか？

それは**「問題をひたすら解く」**ことです。年々問題に変化はあるとはいえ、求められている力は基本的に変わりません。問題をひたすら解いて、傾向と正しい答え方を掴んでいきましょう。近年の中高一貫校ブームで適性検査対策の参考書や問題集も多々出版されるようになりました。さすがに最初から過去問を解くのはきついで、問題集で型と流れを身に付けてから過去問を解きまくるのがいいでしょう。ちなみに僕は12月頃から過去問を解き始めました。過去問は志望学校に拘らず色々な学校の問題を解きましょう。どこの学校も問題の型や問われるものは近似しています。演習量は多いに越したことはありません。

そして**僕が一番大事だと思うものは「やる気」**です。やる気とはもちろん受検する小学生のやる気です。根性論を振りかざすつもりはありませんが、やる気がない人は絶対に受かりません。どんなに親御さんが熱心に勧めても、どんなにいい塾に行かせていいものをお膳立てしても本人のやる気が無ければそれはただの「記念受検」として水泡に帰します。本気でその学校に行きたいと思って懸命に勉強した生徒ですらふるい落とされる世界ですから、嫌々やって生半可に身に着けたスキルでは到底適うはずがありません。よく「逆転合格」とか言われますが、**本気で取り組む**からこそ逆転できるのです。これは高校・大学受験でも一緒です。

**対策と演習で型を身に着ける。そして受験生本人がやる気を持って取り組む**。これが受検態勢のキホンとなります。まだ色々と言いたいことがあるのですが・・・、今回はここまでになりそうです。「過不足なく書く」というのは実に難しいことなんですね。◆(続く)

## 受験奮闘記～桜修館中等教育学校(合格者の声)～

## 「ボクが学んだこと④ いつ、どこで、5W1Hのツッコミ！」 T.S.

## 中学受験生時代の生活

第3回を投稿してから結構な時間が経ってしまいました。自分でも今まで何を書いていたのかすっかり忘れてしまいました。今しがた第3回の内容を復習してきましたので、その時の話も踏まえて今回は受験生時代の生活について“記憶の限り”お話いたします。

小学5年生の2月から某大手都立中高一貫校の受験対策塾に入塾しました。ここから約1年間の受験生生活が始まります。2～3月は週2、3で基本のキの授業しかありませんでしたが、6年生に入ってから週4でみっちり講義を受けました。午後3時に学校が終わり、一旦家に戻っておやつ、4時半に家を出て5時頃の授業に臨む…というのが平日のルーティーンでした。塾の授業は一日2時間半、作文(適性検査Ⅰ)・理系・文系(いずれも適性検査Ⅱ)と作文演習の4授業があり、(現在のカリキュラムとは齟齬があるかもしれません)一日一科目といった感じだったのを記憶しています。しかし受験生とはいえ、所詮小学生です。学校終わりの2時間半のスパルタは当時の僕にとっては全く大変な生活でした。時には授業中にウトウトしてしまい、先生に注意されることもありました。夏になると同じ志望校の他校生と一緒に昼から夜まで授業を受けたり、山奥での合宿や模試の猛攻を受けたりしました。こう綴るとまるで根性論叩き込み塾にいたようにとらえられそうですが、カリキュラムや入試問題の分析・解説は非常に理論的・的を射たもので、特に本番直前の特訓授業で頂いたアドバイスはめちゃくちゃありがたいものでした。あのアドバイスは僕の人生とあの塾のターニングポイントだと思っているのですが、それはまたいつか。

さて話題を前回僕が書いた事柄へ移りましょう。前回僕は適性検査対策として「過不足なく書く」「定量的に説明する」ことを挙げましたが、「そんなのいきなり身に着くわけないじゃん！！」というお声が聞こえました(そんな気がただけ)ので、一つ僕の家で実践していた“特訓”をお教えします。それは「5W1H ツッコミ」です。日常生活においてお子さんと親御さんとで会話をすることがたくさんあると思いますが、皆さんは普段どんな話をお子さんから聞きますか？例えば「先生がね、言ってたんだけど…」と学校で先生から何かお話があったのだろうと思われる話を切り出したとします。そうすると我が家(主に母)ではこう言われます。「いつ？」「どこで？」「誰に？」「誰に？」「誰に？」と。先の切り出しを見ると、明らかに主語や目的語が抜けています。いかにも子供らしい話しっぷりですが、我が家ではこんなものは許されません。いつ、どこで、誰が、何を、どうした、を明確に話さないと決まってツッコミを喰らいます。せつかくお子さんが話しかけてくれたところを猛ツッコミするのは確かに酷なことかもしれません。しかしこれが「過不足なく書く」「定量的に説明する」ことに繋がります。日常会話で相手に伝わる話し方をしないと、本番で上手く説明することなんてできません。ましてや受験では「問題を知らない人に説明する」ことが重要視されます。「これくらい察してよ」は通用しません。相手に「何が？」「どのくらい？」とツッコまれない文章を書けるようにするには、日々ツッコまれなければ身に付きません。少し道が逸れますが、日本人特有の「察して文化」に僕が嫌悪感を抱くのは、もしかしたら受験生時代に喰らった「5W1H ツッコミ」のせいかもしれないなど今思っています…。

さらに受験生には定期的に塾内テストや模試があります。その成績・答案が返された時、我が家でやっていた振り返り方法をお教えします。それは「なぜなぜ」です。「なぜなぜ」とは、ひと昔前に多くの企業で流行った(と言われる)「なぜなぜ分析」です。起こった事象に対して「なぜ起こったのか」を考える、原因がわかったら「なぜそういう原因があったのか」、「なぜそのような状態にあったのか」、「なぜ」「なぜ」「なぜ」…という感じで5回の「なぜ」を追及します。僕は小学生から今に至るまで、母の「なぜなぜ」を喰らいました。「なぜ模試でこのような成績になったのか」「なぜこの点数が悪いのか」「なぜ解けなかったのか」「なぜ時間が足りなかったのか」と。説明したら「なぜ」、それを説明しても「なぜ」と言われるので、メンタルが弱くと潰れるような「なぜなぜ」でした。しかし「なぜ」を繰り返すことで自分の弱点やその時やらかした根本的原因を突き詰めることができ、次回への対策に繋がります。振り返り無くして成長はありません。

塾では昼夜を問わずの猛特訓、家ではツッコミと追及の嵐、と考えただけで地獄のような生活を送っていたわけですが、それでもやらないと受からないのが適性検査。前回僕が「本人のやる気が一番」と言ったのは、こういう生活が1年間続くからです。僕も「こんな生活を経てでも受かりたい、行きたい」という心持が無ければあの学校に受かることも無かったし、ましてや受験生生活自体継続できたかどうか分かりません。入試対策や問題解答は理論で勝負できますが、受験自体は大変な体力勝負・忍耐勝負の根性論に変わりはないということは最後にお伝えしたいと思います。

では区切りがいいので今回はここまで。最後までお読みくださり、ありがとうございました！！

(月1回日曜)【石川塾 日本の歴史を知る朗読会】**無料です**

**第14回:7月7日(日)** 石川塾 10:00～11:30

テキスト:江藤淳「閉ざされた言語空間～占領軍の検閲と戦後日本～」

☎042-710-5768(お問い合わせの際は留守電にお名前・電話番号をおねがいします)



## 受験奮闘記～桜修館中等教育学校(合格者の声)～

## 「ボクが学んだこと⑤ 本番！入試前後の話」 T.S.

さて長々と続いた都立中高一貫校受検のお話も今回で一区切りです。受検対策についてまだまだ話し足りないところがあるのですが、これはあくまでも受験体験記ですので、ここで中学入試編はおしまいにしようと思います。そこで今回は、受検本番前後の裏話についてお話します。今までの話の中で最も個人差の出る内容かとは思いますが、何かの参考になれば幸いです。

1月、正月の初詣はさることながら、とある**神社に参拝**をしました。その神社とは上野公園不忍池の近くにある湯島天神です。ここは学問の神様・菅原道真公を祀っていて、毎年多くの受験生や資格試験前の人たちがご利益をもらいに参拝します。菅原道真公と言えば梅、ということもあって境内には梅の木がたくさん植えられています。しかし見頃がちょうど2月なのでこの日は梅の花は見れませんでした。花が2月に咲くのは、きっと受検に成功して「おかげ参り」してきた人にきれいな花を見せたいがためなのでしょう。必ずここで梅の花を見るぞと決意し5円玉を投入、そのあと牛の銅像の頭を撫でて更なる祈願をしました。みんながみんな頭を撫でるので、牛の頭は完全にツルツルになっていました。参拝後は近所にある「十八割蕎麦屋」という蕎麦屋が出している**「合格そば」を食べました**。そばの上に金粉が乗っていて見た目もゴージャスでした。このお店は現在春日部の郊外にあります。

2月になると、本番までもう2日しかありません。ひたすら塾の直前特訓に通います。その際先生からこんな予想が。**「今年の適性検査Ⅰでは文章が出るだろう」と**。通年当校の適性検査Ⅰでは絵や写真を提示して文を書かせていたのですが、今年は初めてその殻を破るだろうと言ったのです。そこで受講生たちは短い文章を提示された問題を解き続けました。例年と違うものを出すかもしれない。塾にとっても僕たちにとっても緊張感のある2日間でした。

そして受検本番。早朝に起き態勢を整えます。リュックには湯島天神で買ったお守り4つ、父が筑波山で買ってくれたお守り1つ、近所の神社のお守りいくつか、総じて**9つのお守りをつけました**。傍から見れば完全に神頼みな受験生に見えたことでしょう(笑)。さあ本番、まずは適性検査Ⅰです。直前に言われた「文章が出る」の言葉、この真偽を証明するときが来ました。問題用紙が配布され、紙越しにうっすらと見える情報を覗きました。絵や写真は見えません。文です！！**塾の読みは大当たりでした**。まだ試験は開始されていないというのに、私は既に**小さくガッツポーズ**を机の下でとっていました。先生の予想に感謝です。45分、しっかり書ききりました。適性検査Ⅱでは自分の得意な大問2から始め、次に1→3と解きました。計算ミスはないか、問われていることとずれていないか、過不足なく書けているか、入念にチェックしながら解き進めていきます。よくこの作業を45分の中でやれたものだと思ってもかつての自分に感心してしまいます。

受検後、9日の結果発表までの6日間は平静に過ごしました。結果が気になることもありましたが、1年間の努力をねぎらうのに時間を使いました。読みたかった“封印本”を読み漁り、とにかくやりたいことをやりました。振り返りの時間はほとんどありませんでした。模試と違って1年に何度もあるわけではありませんし、それにもう終わったことですのでそこは割り切りました。受検直後で何かと後ろめたい気持ちが親御さんにもお子さんにもあるかと思いますが、まずは1年間戦い抜いたお子さんを褒めてあげてください。お子さんもこれまでのストレスを存分に解消してください。

そして運命の日、2月9日。この日は少々の雨が降っていました。果してこれがどっちの“涙雨”になるやら、極度の緊張が襲います。学校の校門近くの駐車場スペースに合格者受検番号が掲示されていました。僕は頭の古い人間なのか、受験の合格発表と聞いて白いプラカードや看板にずらっと番号が並んでいるのを想像していました。しかし実際には段ボールに番号を印刷した白い感熱紙を貼り付けただけのものだったので、少しがっかりしました。そんなことはともかく、印刷された番号から**自分の受験番号**を探します。それは男子枠の列の真ん中ほどにありました。**見つけた瞬間、持っていた折り畳み傘を放り投げて絶叫しました**。周りに他の受験生がいなくてよかったと思っています(笑)。かくして、僕の都立中高一貫校受検は最高の形で幕を閉じました。約5倍という倍率を乗り越え、見事花を咲かせました。

それでは最後にもう一ネタ。この受検にあたって、**合格の暁にはスマートフォン**の購入が確約されていました。今の小学生にとっては信じられないようなことですが、僕たちの時代では小学生がスマホを持つなんてことは(多分)ありえない話でした。4つ上の姉でさえも、スマホを持ち始めたのは中学校2年生くらいの頃です。持っているのはせいぜいメールや電話機能しかない子供ケータイ。適当な文字を打ったり、待ち受け画面の設定をいじったりするのが僅かな楽しみで、**「なんとか受かってスマホを手に入れてやる」と**意気込んでいました。スマホを持つことが当たり前になった今のお子さんは、僕が経験した受検生活が想像できるだろうか……と子どもたちに少し嫌がられそうなことを言っている(いわゆる「老害ムーブ」)中学受検編を締めたいと思います(笑)。

【石川塾 日本の歴史を知る朗読会】高校生から参加できます

第17回:11月10日(日) 石川塾 10:00～11:30 無料です

テキスト:江藤淳「閉ざされた言語空間～占領軍の検閲と戦後日本～」(文春文庫¥740)

